



サトリの ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗僧侶

バセット 貫成さん

第20回

私はアメリカの大学で東南アジア研究を専攻しました。「もっと日本について勉強したい」との思いから、4年生のときに関西外国語大学に留学。より深く仏教を学びました。大学を卒業後、静岡県に就職、転職を経て1999年から東京で暮らしています。

当時、東京にはイタリア系アメリカ人の日蓮宗僧侶が自宅を開放して一般の人にお経と法話を行う「日曜サービス」というものがありました。私は知り合いから聞いて、2000年からその小さなコミュニティに参加するように。当時の

私には「これから仕事で何をしようか」「もっといろいろ勉強したい」という迷いがあつたからです。その日曜サービスで、私は今までに経験したことのない仏教に触れることができました。まさに心で感じる仏教！ もう少し勉強したい、と週1回通うようになりました。そして2001年、日蓮宗の信仰に入ったのです。

母の最期を看取ったことが僧侶になるきっかけに

アメリカにいたときは、私の母が割に熱心な信者だったこともあり、私はキリスト教徒でした。ただ、特に信仰心というほどのものはありませんでした。そんな母が2003年、膀胱がんと診断されました。母はそれ以前から、私が日蓮宗に入ったことに興味を持っていたので、帰国したときに小さな曼陀羅を持って、お題目を説明しました。母はキリスト教徒でしたが、仏教にも抵抗はなかったようです。がんになつてより信仰心を深めたのは、きつと安らぎ感を得たかったのでしょう。

2005年、「あと半年」という末期の告知を受けました。それから最期まで、自宅で見守りました。亡くなったとき、「信仰心のあつた母に何かできることはないか？」と私は考えました。アメリカ式に



上・2009年からは日蓮宗宗務院国際課で『Nichiren Shu News』の翻訳業務にもかかわっている。宗務院での仕事師の風景。海外の開教のサポートも行う。



簡単に送るのは、母の見送りに合わない……。そこで私は仏教式の見送りを行いました。お経をあげて、お線香をあげて、家族揃ってきちんと見送る……。それによって、母の供養がきちんとできたと感じました。その後、日本に戻り、日蓮宗の修行を経て、一人前の僧侶として僧籍に入りました。

毎日の中で感謝の心を 持つことが大事

私が仏教に出合つて学んだことは、毎日感謝をすることです。今の自分があるのは先祖のおかげ。目に見えないものにも、生活の中で感謝をすることが大事だと知りました。同様に、私たちは生活を便利になつていくぶん、大事なことを忘れていきます。手書きだったものがパソコンになり、字を忘れていく。近所の助け合いで生活していたのに、付き合いが少なくなつていく……。現代社会がどんなに遠ざかっているもの、それが本当に大事なことです。

本当に大事なことは何か
感じる、ことが大切です

ばせつと・かんじょう 1961年、米ボストン生まれ。ワシントン&リー大学にてアジア研究・アメリカ歴史を専攻。1985年に関西外国語大学に留学し、日本語・仏教研究を専攻する。卒業後は日本で就職。英語教師やDTPシステムマネージャーなどを経て、2003年から米カリフォルニア州の企業のビジネスレポーターに。2001年に日蓮宗の信者となり、2008年に僧籍に入る。